

九州地方における「天国」の受容史

——宗教差，地域差，場面差——

小川 俊輔

キーワード：言語接触，言語変化，受容，キリスト教用語，地理言語学

要 旨

九州地方における「天国」の受容の程度を明らかにするため，九州地方全域 300 地点において現地調査を行った。調査によって得られた資料から言語地図を描き，考察を行ったところ，「天国」の受容には，宗教差，地域差，場面差のあることが分かった。宗教差については，カトリックと神道の信徒が「天国」を受容しているのに対し，浄土真宗の信徒は「天国」を受容しない傾向がある。彼らは仏教語である「浄土」を持つゆえに，「天国」を受容しない傾向をみせたと推測される。地域差については，宮崎・鹿児島では「天国」の受容が進んでいるのに対し，長崎では遅れている。場面差については，大人が子どもに話しかける場面では「天国」が使用されやすいのに対し，仏教色の強い場面では「天国」が使用されにくい。

1. はじめに

1.1. 本稿の目的

「天国」は明治時代初期にキリスト教会で使用され始め，やがて広く一般に使用されるようになった語である。この語の受容の実態を，地理言語学的調査に基づいて記述することが本稿の目的である。フィールドは九州地方とする。九州地方を対象にするのは，九州地方，とりわけ長崎・熊本は，「カクレキリシタン」が存在し，かつて「反キリスト教的な思想／風潮」がみられたこと（小川，2007b；OGAWA，2010）などから日本国内において特異なキリスト教史をもつ地域であると考えられるためである^{注1}。

1.2. 本稿の構成

まず，文献における「天国」の初出とその後の展開を確認する（第2節）。続いて「天国」の言語地図を概観し（第3節），「天国」の受容における宗教差，地域差，場面差について考察を行う（第4節）。最後に考察から明らかになったことをまとめ（第5節），今後の展望を述べる（第6節）。

2. 文献における「天国」の歴史

加藤 (2006) は、文献における「天国」の歴史について、キリスト教教理書、対訳辞書、国語辞書、読売新聞、文学作品における用例に基づいて幅広く記述・検討している。但し、国語辞書に限ると、8種のを検討するのみにとどまっている^{注2}。そこで本節では、明治期から現在に至るまでの国語辞書における「天国」の記載内容の変遷について、やや詳しく整理しておきたい。

2.1. 「天国」の初出文献

国語辞書の記述について整理する前に、「天国」の初出文献について簡単に触れておく。管見の限りにおいて、国内で執筆された文献に「天国」が初めて表れるのは平田篤胤 (1806) 『本教外篇』においてである^{注3}。この書は、漢文で書かれた中国のキリスト教書を読んだ平田が、私的に書き付けたものであるという (鈴木, 2006)。国内で公刊された日本語 (和文) の文献上に「天国」が初めて用いられたのは James Curtis HEPBURN 訳 (1873) 『新約聖書 馬太伝』であり、この書の出版後、キリスト教宣教師の手により多くの聖書翻訳が行われ、「天国」は広く使用されるようになっていった (加藤, 2006)。

2.2. 辞書における「天国」の記述——明治期から現在まで——

次頁の表 1 は、明治期から現在までの国語辞書について、見出し語として「天国」が立項されているかどうか、また「キリスト教用語／一般語としての「天国」」という説明に焦点をあてて整理したものである。管見の限り、「天国」が見出し語として登場する最初の国語辞書は高橋 (1888) 『漢英対照 いろは辞典』である^{注4}。また、高橋 (1888-89) 『和漢雅俗 いろは辞典』および高橋 (1893) 『和漢雅俗 いろは辞典 増訂 2 版』においても、「天国」は立項されている。これらの辞書には「「天国」はキリスト教用語である」との言及はない。但し、高橋は HEPBURN らとともに聖書和訳集団である「翻訳委員社中」に参加した人物なので、高橋の手による上記 3 つの辞書に「天国」が立項されている背景にキリスト教教理書における「天国」の用例があるものと推測される。

高橋の編纂した諸辞書と前後して刊行された大槻 (1889-91) 『言海』、山田 (1892-93) 『日本大辞書』、藤井他 (1896) 『帝国大辞典』では、「天国」が立項されていない。そして、落合 (1898) 『ことばの泉』から上田他 (1939-41) 『修訂 大日本国語辞典』の間に刊行された戦前の諸辞書は、「天国」を立項し、これをキリスト教用語だと説明している。

続いて、戦後の辞書に目を移す。新村 (1955) 『広辞苑』は、一般語としての「天国」およびキリスト教用語としての「天国」双方を説明している。その後、大槻 (1956) 『新訂 大言海』や新辞源編集委員会 (1963) 『新辞源』のように、キリスト教用語としての「天国」のみを説明するものもあるが、多くの辞書は新村 (1955) 『広辞苑』のような記述

表1 国語辞書における「天国」の記述

編著者	刊行年	辞書タイトル	
高橋五郎	1888	漢英対照 いろは辞典	●
高橋五郎	1888-89	和漢雅俗 いろは辞典	●
大槻文彦	1889-91	言海	
山田美妙	1892-93	日本大辞書	
高橋五郎	1893	和漢雅俗 いろは辞典 増訂 2 版	●
藤井乙男他	1896	帝国大辞典	
落合直文	1898	ことばの泉	○
金澤庄三郎	1907	辞林	○
山田美妙	1912	大辞典	○
上田萬年	1917	大字典	○
簡野道明	1923	字源	○
石川貞吉他	1934-36	大辞典	○
上田萬年他	1939-41	修訂 大日本国語辞典	○
新村出	1955	広辞苑	○●
大槻文彦	1956	新訂 大言海	○
新村出	1961	言林	○●
新辞源編集委員会	1963	新辞源	○
新村出	1976	広辞苑 第 2 版補訂版	○●
中山行雄	1978	旺文社 新総合国語辞典	●
新村出	1983	広辞苑 第 3 版	○●
金田一春彦他	1988	学研国語大辞典 第 2 版	○●
市川孝他	1988	現代国語辞典	○●
講談社辞典局	1989	現代実用辞典	○●
新国語研究会	1990	国語大辞典	●
旺文社	1990	国語総合新辞典	●
新村出	1991	広辞苑 第 4 版	○●
小学館辞典編集部	1993	現代国語例解辞典 第 2 版	○●
三省堂編修所	1993	辞林 21	○●
梅棹忠夫他	1995	日本語大辞典 第 2 版	○●
山田俊雄他	1995	新潮国語辞典 一現代語・古語一 第 2 版	○●
奥山益朗	1997	「死」にまつまる日本語辞典	○●
新村出	1998	広辞苑 第 5 版	○●
金田一春彦	2002	学研 現代新国語辞典 改訂第 3 版	○●
沖森卓也他	2003	ベネッセ表現読解国語辞典	○●
松井栄一	2005	小学館 日本語新辞典	○●
松村明	2006	大辞林 第 3 版	○●
新村出	2008	広辞苑 第 6 版	○●
凡例	無印 = 記載なし ○ = キリスト教用語としての「天国」を記載 ● = 一般語としての「天国」を記載		

となっている。そして、中山（1978）『旺文社 新総合国語辞典』や新国語研究会（1990）『国語大辞典』、旺文社（1990）『国語総合新辞典』のように、「キリスト教用語としての「天国」」にかんする記述のみられない辞書も現れる。

以上から、「天国」の歴史は(1)から(3)のようにまとめることができる。

- (1) 明治初期にキリスト教会において使用され始めた。
- (2) やがて、キリスト教の文脈を離れて用いられるようにもなった。
- (3) 近年、キリスト教の文脈を離れて用いられる傾向が強まっている。

3. 言語地図

3.1. 調査の概要

本調査は、九州地方における外来語（バテレン、ビードロなど）の受容の実態を明らかにすることを目的として行われた。

- (1) 調査期間：2003年8月から2005年11月 (2) 調査者：筆者
- (3) 対象話者：原則として2005年11月時点における60歳以上の生え抜き（言語形成期の外住歴3年以内、言語形成期を含めて外住歴10年以内）^{注5}
- (4) 調査方法：統一調査票による質問調査、現地調査（フィールドワーク）
- (5) 県別調査地点数：福岡16、佐賀20、長崎162、熊本33、大分20、宮崎20、鹿児島29。合計300地点^{注6}。このうち38地点は『最終調査票』とは異なる質問文により調査が行われた。このため、本稿で考察の対象とする言語地図（地図1）は、『最終調査票』による262地点の調査結果に基づいて描かれている^{注7}。具体的な調査地点は小川（2007a）を参照。
- (6) 質問文：「生前よい行いをして亡くなった人が、死後に行く場所を何と言いますか？」「「極楽浄土」, 「天国」, 「パライズ」などと言いませんか？」^{注8}

まず、1つめの質問を行い、回答語形を記録した。続いて2つめの質問を行い、誘導のかたちで各語形の使用の有無を確かめた^{注9}。

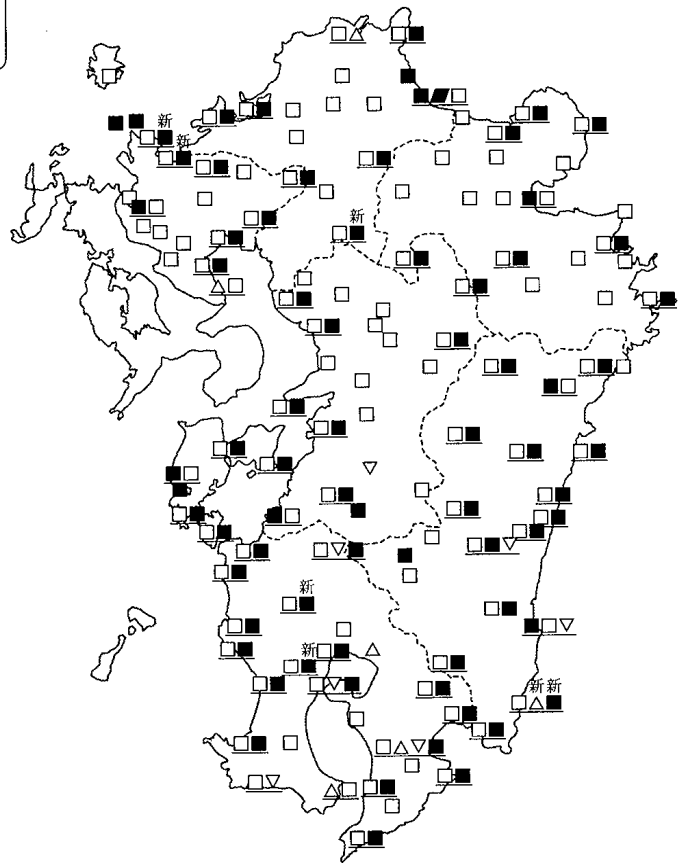
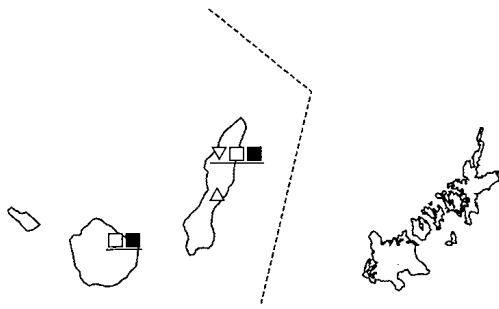
以上の質問文に対して回答された各語形について、話者から様々なコメントが得られた。これは話者が自発的に発言したものである。また、複数の語形が回答された場合に、逐一、新古の判断を尋ねるということはしていない。

3.2. 分布の概観

地図1を巨視的に概観すると次の4点に気がつく。

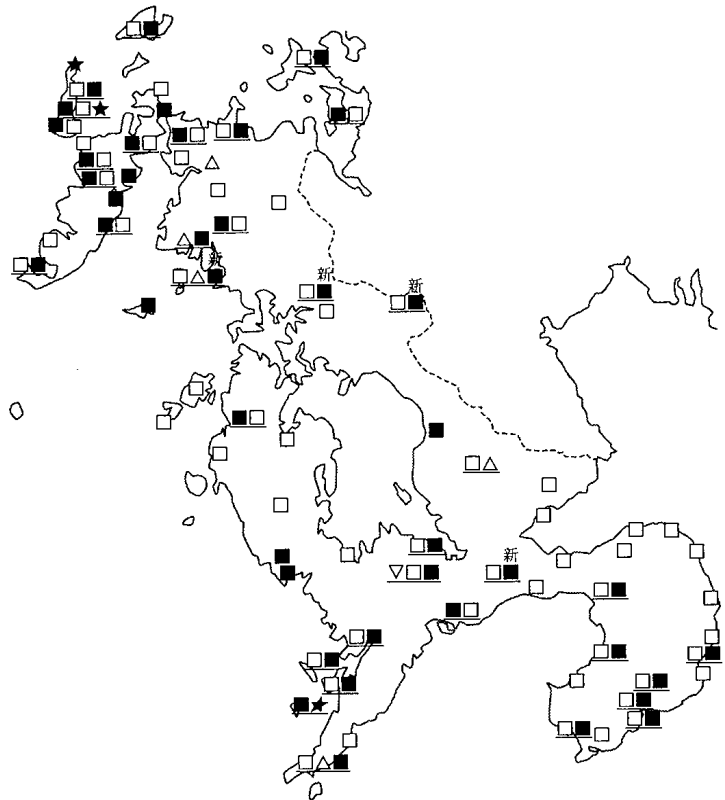
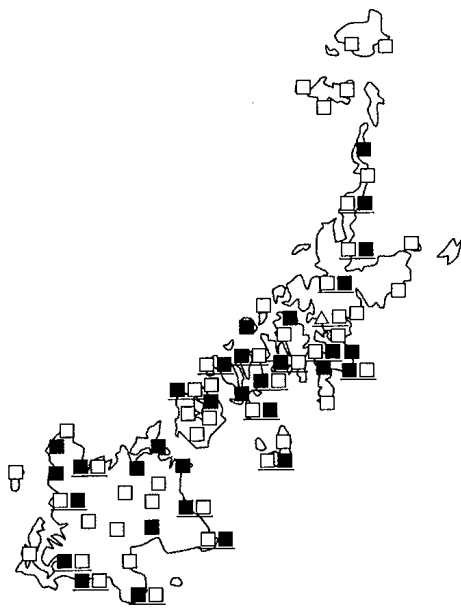
- (1) 仏教語“□”（「極楽」「浄土」「極楽浄土」など）は全域に分布している。
- (2) 「天国」“■”も全域に分布するが、分布していない地点も目につく。
- (3) 「天の国」“■”，「あの世」「先の世」“△”，「よかところ」“▽”がわずかに分布している。

九州地方言語地図
A LINGUISTIC ATLAS OF KYUSHU



【凡例】

- 仏教語
ゴクラク, ジョード, ゴク
ラクジョード, メードなど
- テンゴク
- ▣ テンノクニ
- △ アノヨ, サキノヨ
- ▽ ヨカトコロ
- ★ パライズ
- ★ パライソ
- 併存事象
- 新 併存事象のうち, 新しい
語形であるとの内省報告
があった事象



質問文 「生前よい行いをして亡くなった人が, 死後に行く場所を何と言いますか？」
「[極楽浄土], 「天国」, 「パライズ」などと言いませんか？」

地図1 天国

(4)「パライゾ」系“★”“★”が長崎県の3地点に分布している^{注10}。

本稿では、(1)仏教語“□”と(2)「天国」“■”に注目し、分析を行う。

凡例に記したとおり、符号の上に「新」の字が付されている語形は、「併存事象のうち、より新しい語である」との内省が得られたものであることを示している。九州全域10地点で「天国」“■”に対してこの内省が得られたこと、また、仏教語を「新しい」とする内省は得られなかったこと、および第2節から、九州地方全域において広く仏教語が分布していたところに、新語である「天国」が伝播し、受容されつつあると考えることができる。

4. 九州地方における「天国」の受容

4.1. 宗教差——「天国」を受容するカトリック・神道, 受容しない傾向がみられる浄土真宗——

まず話者の帰依する宗教・宗派に注目し、「天国」の受容の様相をみることにする。第2節で確認したように、「天国」はキリスト教用語として用いられ始めた語であり、その受容には人々の信仰が深く関わっていると考えられるからである。

4.1.1. 調査結果

次頁の表2は、話者の宗教×「天国」相当語のクロス集計表である^{注11}。 χ^2 二乗検定の結果、「天国」相当語の回答には、0.1%水準で有意差が認められた($\chi^2=142.081$, $df=54$, $p=0.000$)。残差分析の結果、調整済み残差が絶対値2より大のセルを特徴的なセル^{注12}としてみて、以下、話者の宗教属性と「天国」相当語の現れ方との関係を見ていく。まず、「天国」については、カトリックと神道に多く、浄土真宗において少なく現れた。「極楽」系についてはカトリックにおいて少なく現れた。「浄土」系については、浄土真宗に多く、カトリックと神道において少なく現れた。「冥土」系については、日蓮宗において多く現れた。「パライゾ」系についてはカトリック、カクレキリシタン、その他において多く現れた。その他(「アノヨ」「サキノヨ」「ヨカトコロ」など)については神道において多く現れた。

4.1.2. 結果の解釈

カトリックの話者が「天国」を受容する傾向をみせているのは、「天国」が元々キリスト教用語だからだと考えてよいだろう。また、神道の話者が「天国」を受容する傾向をみせている理由としては、(1)仏教徒が仏教語である「浄土」などをもつために「天国」を受容しない場合があるのに対し、神道氏子は「善者の行く死後の世界」を表す明確な神道語をもっていないこと^{注13}、(2)「天照大神」や「高天原」などの語をもつために、「天」という語に対する親和性がある、などが考えられる。

次に、浄土真宗の話者が「天国」を受容しない傾向をみせている理由についてだが、これは、宗派の名前に「浄土」を冠しているために、死後の世界を表す語として「浄土」

表2 各宗教における「天国」相当語出現率(%)と調整済み残差[複数回答あり]

話者の宗教 (n = 話者数)		「天国」相当語						その他	
		「天国」	「極楽」系	「浄土」系	「極楽浄土」系	「冥土」系	「パライゾ」系		
カトリック (n = 22)		100.0	13.6	0.0	0.0	0.0	4.5	4.5	
		5.9	-3.4	-2.4	-1.2	-0.3	2.1	-0.2	
カクレキリシタン (n = 3)		100.0	33.3	0.0	0.0	0.0	33.3	0.0	
		1.4	-1.0	-1.0	-0.5	-0.1	5.7	-0.5	
仏教系	浄土宗 (n = 28)	46.4	92.9	42.9	10.7	0.0	0.0	10.7	
		-1.3	0.5	0.9	0.3	-0.5	-0.6	0.3	
	浄土真宗 (n = 95)	51.6	90.5	49.5	8.4	1.1	0.0	6.3	
		-2.1	0.4	3.3	-0.5	0.3	-1.4	-1.3	
	禅宗 (n = 34)	61.8	97.1	26.5	17.6	0.0	0.0	2.9	
		-0.1	0.8	-1.0	1.7	-0.6	-0.7	-1.4	
	真言宗 (n = 3)	66.7	100.0	33.3	0.0	0.0	0.0	0.0	
		0.2	0.4	0.0	-0.5	-0.2	-0.2	-0.5	
	日蓮宗 (n = 10)	70.0	90.0	20.0	0.0	10.0	0.0	10.0	
		0.5	0.2	-0.8	-1.0	3.3	-0.4	0.1	
	宗派未詳 (n = 46)	43.5	84.8	28.3	10.9	0.0	0.0	15.2	
		-1.4	0.8	-0.4	0.7	-0.6	-0.8	1.8	
	神道 (n = 14)		85.7	57.1	0.0	7.1	0.0	0.0	28.6
			2.0	-1.1	-2.3	-0.1	-0.3	-0.4	2.8
その他[エホバ, 創価学会等] (n = 7)		42.9	71.4	14.3	0.0	0.0	14.3	0.0	
		0.0	0.5	-0.6	-0.7	-0.2	3.9	-0.7	

[注] セル中数値1行目は話者属性群ごとの比率(%), 2行目は調整済み残差である。

[注] 「天国」相当語の「その他」は, 「アノヨ」「サキノヨ」「ヨカトコロ」などである。

[注] 話者の宗教の「その他」は, 「エホバの証人」の信徒(1人), 「創価学会」の学会員(2人), 無宗教(1人), かつてはカクレキリシタンであったが, 信徒組織が解散した為に現在は仏教徒となっているものの, 個人的なカクレキリシタン信仰がいちぶ残っている人(3人)である。

[注] 各宗教における「天国」相当語の構成比率の偏りについて χ^2 乗検定を行い, 0.1%水準で有意差が得られた。

[注] 残差分析の結果, 調整済み残差が絶対値2より大のセルを白黒反転で示した。

が意識されやすいからではないかと考えられる。

また, 話者からは次のような内省が得られた。○数字以下が1人の話者からの説明である。()内に話者の帰依する宗派, 調査地, 調査年月日を記す。

- ①「『浄土』参り」とお寺で言う。「天国」はキリスト関係の言い方で浄土真宗では言わない(浄土真宗, 長崎県東彼杵郡川棚町百津郷岩立, 2004.6.24)
- ②私は真宗だから「浄土」と言う(浄土真宗, 佐賀県神埼郡三瀬村三瀬, 2005.8.28)
- ③「浄土」が普通。「極楽」はあまり言わない。真宗では「天国」とは言わない(浄土真宗, 熊本県熊本市銭塘町, 2005.10.2)

これらの説明から、浄土真宗信徒が「天国」を受容しない傾向をみせている理由として宗旨を挙げることができそうである。浄土真宗は「南無阿弥陀仏」と唱えることにより、現世における死の後、「極楽浄土」への往生を説く。このことについて、全262人の話者のうち36人から「浄土真宗の僧侶は説法などの際に『浄土』『極楽浄土』を口にする」との教示があった。

④「お浄土」は説教の時にきく（浄土真宗，長崎県南高来郡西有家町慈恩寺名丸尾，2004.7.13）

さらに，信徒に「天国」を使わぬよう指導している僧侶もいる。

⑤仏教の信心のある人は「お浄土」と言う。弔辞などでも「お浄土」。親戚が弔辞で「天国」と言い，お坊さんが怒ったことがある（浄土真宗，福岡県行橋市神田町，2005.8.1）⑥「天国」はキリスト教の言葉。お寺で「天国」と言うと怒られる（浄土真宗，鹿児島県曾於郡大隅町月野字下岡，2005.11.22）

浄土真宗信徒が「浄土」をよく使うことについては他宗派の信徒からも教示があった。

⑦浄土真宗の人は「お浄土」と言う（真言宗，長崎県北松浦郡鹿町町下歌ヶ浦免，2004.6.22）⑧「極楽浄土」「ご浄土」は真宗の言い方（曹洞宗，大分県宇佐郡安心院町折敷田，2005.10.15）

これらをまとめると，浄土真宗の信徒が「天国」を受容しない傾向をみせている背景に，「浄土」という語の存在があると考えることができる。

最後に，「パライゾ」系についてふれておく。「パライゾ」系は全262人の話者のうち，3人から回答があった。表2が示しているとおおり，この3人の話者の帰依する宗教はそれぞれ，カトリック，カクレキリシタン，その他である。このうちカトリックの話者は，先祖がカクレキリシタンで，親の代にカトリックに改宗した人である。また，その他の話者は，かつてはカクレキリシタンであったが，信徒組織が解散した為に現在は浄土真宗の信徒となっているものの，個人的なカクレキリシタン信仰が一部残っている人^{注14}である。

4.2. 地域差——「天国」を受容する宮崎・鹿児島，受容しない傾向がみられる長崎——

ここで改めて地図1に目をやると，宮崎・鹿児島には「天国」の回答を示す■が（長崎・大分・佐賀・福岡に比べて）濃密に分布していることに気づく。この視覚的な印象を具体的な数値で確認する（表3）。但し，ここでは仏教徒である話者の地域差のみをみていく。非仏教徒話者は全体数が少ないために地域差がみえにくいためである。

4.2.1. 調査結果

表3は，仏教徒における地域×「天国」使用／不使用のクロス集計表である。 χ^2 二乗検定の結果，県ごとの「天国」の使用の有無には1%水準で有意差が認められた（ $\chi^2=20.504$, $df=6$, $p=0.002$ ）。また，残差分析の結果，調整済み残差が絶対値2より大の特

表3 仏教徒における「天国」の使用／不使用率（％）と調整済み残差

県 (n = 話者数)	使 用	不 使 用
宮崎 (n = 17)	88.2	11.8
	3.1	-3.1
鹿児島 (n = 23)	78.3	21.7
	2.7	-2.7
熊本 (n = 23)	56.5	43.5
	0.5	-0.5
福岡 (n = 12)	41.7	58.3
	-0.7	0.7
佐賀 (n = 15)	40.0	60.0
	-1.0	1.0
大分 (n = 20)	40.0	60.0
	-1.1	1.1
長崎 (n = 106)	44.3	55.7
	-2.2	2.2

[注] セル中数値1行目は話者属性群ごとの比率（％）、2行目は調整済み残差である。

[注] 仏教徒における「天国」の使用／不使用（県別）の構成比率の偏りについて χ^2 二乗検定を行い、1%水準で有意差が得られた。

[注] 残差分析の結果、調整済み残差が+2より大のセルを白黒反転で示した。

徴的なセルは、宮崎と鹿児島および長崎であった。「使用」については宮崎と鹿児島において、「不使用」については長崎において多く現れた。すなわち、宮崎と鹿児島の話者は他県の話者よりも「天国」を受容し、長崎の話者は他県の話者に比べ「天国」の受容が少ない傾向をみせている。

4.2.2. 結果の解釈

「天国」は明治以降に使用の広がった共通語形であることから、従来の地理言語学の方法による分布解釈は難しい。このため、なぜ4.2.1.に示されたような地域差がみられるのかは分からない^{注15}。

4.3. 場面差——子ども向けの「天国」、僧侶向けの「浄土」——

ここでは「天国」の受容の場面差について、話者からの教示を手がかりに整理する。結論を先に記せば、(1)「天国」は子どもに対して使用されやすく、(2)僧侶を相手に話す時や、お寺という空間、法事の場面などにおいては「浄土」が使用されやすく、「天国」の使用は控えられる。

⑮大人同士では「極楽」を使う。子どもには「天国」を使う。「天国」は子どもには聞きやすい言葉（仏教、長崎県諫早市多良見町佐瀬、2004.6.26）⑯子ども相手に話す時には「天国」を使う。子どもは「極楽」と言っても分からないから（浄土真宗、

大分県別府市楠町, 2005.8.4) ⑰子どもたちには「浄土」と言っても分からないから「天国」と言う(浄土真宗, 鹿児島県薩摩郡さつま町宮之城屋地川原, 2005.11.4)

これらの説明は互いに隣接しない12地点においてなされた。すなわち, 子どもに対する配慮表現として「天国」を使用するのは, 地理的に伝播した使用法ではなく, 同時多発的に行われ始めたもののようである。

他方, 4.1. でみたように, 「浄土」は僧侶(特に浄土宗・浄土真宗の僧侶)が説法で用いる語であり, 仏教色の濃い語だと認識している人が多い。

⑱お寺では『浄土』に行く」と言う。地元の人同士では「極楽」(浄土宗, 長崎県佐世保市早岐町権常寺町, 2004.6.23) ⑲「お浄土」「浄土」はお寺参りした時に使う。ごいんげさんが使う。一般の人は一般には使わない(浄土真宗, 長崎県西彼杵郡大島町大島, 2004.6.29) ⑳普通は「極楽」と言う。「お浄土」はお悔やみの言葉で言う。(禅宗, 長崎県南高来郡国見町神代字小路, 2004.7.28) ㉑「お浄土」は説法の時や改まった時に言う(浄土真宗, 大分県宇佐市葛原, 2005.8.3) ㉒「極楽」が土着の言葉, 普通の使いやすい言葉。「極楽浄土」「浄土」は普通には使わない。お坊さんのお話の中で出てくる(浄土真宗, 熊本県荒尾市日の出町, 2005.10.1)

彼らは, 僧侶を相手に話す時や, お寺という空間, また法事などの仏教的場面においては「浄土」を選択的に使用し, 「天国」を使用しないのである。

5. まとめ

本論(第2節から第4節)で明らかになったことをまとめる。「天国」は明治初期に邦訳聖書の中で使用され始めたキリスト教用語であった(2.1.)。その後, 「天国」のキリスト教色は薄れ, キリスト教徒以外の人々にも使用され始めた(2.2.)。しかし, 一様に受容が進んだのではなかった。現地調査の結果, 九州地方における「天国」の受容には, 宗教差, 地域差, 場面差のあることが分かった。宗教差については, カトリックと神道の信徒が「天国」を受容しているのに対し, 浄土真宗の信徒は「天国」を受容しない傾向がみられた。その背景には各宗教/宗派の教義や宗旨, 僧侶の指導があると考えられる(4.1.)。地域差については, 鹿児島・宮崎では「天国」の受容が進んでいるのに対し, 長崎では遅れている(4.2.)。さらに, 「天国」の受容と使用には場面差も認められ, 子どもに対して話す場面では「天国」が使用されやすいのに対し, 仏教色の強い場面においては「浄土」が用いられるため, 「天国」は使用されにくい(4.3.)。

6. おわりに——今後の展望——

本稿には, 次のような課題が残っている。まず, 「パライゾ」と「天国」の歴史的関係にかんする考察が十分に行われていない。「パライゾ」は, 幕末明治期に長崎で出版されたプチジャン版と呼ばれるキリスト教教理書に用例がみられる語であるが, その後,

カトリック教会指導部は「パライズ」を排し、「天国」を用いるようになっていった（小川, 2007a）。その「パライズ」が今日まで使用され続けてきた理由、さらに、当該地域において「パライズ」から「天国」への変遷が起きた時期などについては、明らかにすることができなかつた。また、キリスト教会では、1987年に改訂・出版された『新共同訳聖書』以降、「天国」は「天の国」と改められたが、キリスト教徒は「天国」と「天の国」とをどのように捉え、位置づけ、使用しているのだろうか（地図1において「天の国」は1地点に分布）。さらに、本稿では「天国」「極楽」「浄土」について、すべて同じ概念を表す語（「地獄」の対義語）と仮定して議論を進めてきたが、その仮定は正しいのかどうかを検証する必要がある。「天国」との接触によって、キリスト教徒以外の人々の「死後の世界」観は変わったのか、変わったとすればどのように変わったのかを明らかにすべきである。全国における状況、若年層における「天国」の受容の実態については現在調査中である。以上すべて、今後の発展的課題として取り組みたい。

注1 小川（2006）と OGAWA（2006）は、長崎県とその周辺地域における「天国」の受容史を地理言語学的に記述したもので、本稿は、その延長線上に位置づく。

注2 加藤（2006）が言及する国語辞書は以下のとおり。大槻文彦（1889-91）『言海』、山田美妙（1892-93）『日本大辞書』、藤井乙男他（1896）『帝国大辞典』、落合直文（1898）『ことばの泉』、上田萬年（1917）『大字典』、簡野道明（1923）『字源』、市川孝他（1988）『現代国語辞典』、新村出（1955, 76, 83, 91, 98）『広辞苑』初版～第5版。

注3 日本国語大辞典第2版編集委員会（2000-02）『日本国語大辞典』（第2版）は「天国」の初出を翻訳委員社中訳（1880）『引照新約全書』「馬太伝福音書」としている。

注4 対訳辞書では、James Curtis HEPBURN（1886）『和英語林集成』（第3版）において「天国」が立項されている。

注5 各地点における話者の選定方法は、概ね次の手続きによった。まず、(1)筆者が飛び込みで調査地を訪ね、(2)調査地集落／町内にある商店または町内会長宅を訪問し、調査の趣旨と話者の条件を説明して適任者を推薦してもらい、(3)被推薦者の自宅／職場を訪ね、(4)被推薦者が調査地における伝統的方言を話すかどうか、昔のことをよく覚えているかなどを勘案しつつ、決定した。なお、全262地点のうち、条件を外れる話者数は以下のとおりである。(5)言語形成期に4年以上の外住歴がある話者：12人。(6)11年以上の外住歴がある話者：13人。

本稿では、これらの条件から外れる話者についても考察の対象とし、言語地図にも回答を掲載した。それは、現地に詳しい店主や町内会長に推薦された人であること、また、その他に適当な話者が得られない地点があったこと、などの理由による。

注6 キリスト教用語は、他県に比べ長崎県において大きな地域差をみせるため、長崎県の調査地点を多くとった。

注7 地図1は、上段に長崎を除く九州全域と壱岐、下段に長崎領域の調査結果を示している。対馬および屋久島より南の島々は調査していない。

注8 この調査項目の直前に「生前悪い行いをして亡くなった人が、死後に行かされる場所を

何と言いますか?」という質問をし、「地獄」概念を表す語形を調査している。

注9 地図1上では、自発的な回答(1つめの質問に対する回答)と誘導による回答(2つめの質問に対する回答)とは区別されていない。 χ^2 二乗検定を行ったデータ(表2・表3)についても同様である。

注10 地図1上の「パライゾ」系の分布は、当該地域におけるキリシタン史を背景に形成されたものと考えられる(小川, 2011)。すなわち、「パライゾ」系の分布にはさまざまな歴史的事情が関わっていると考えられ、その分布に対する考察は興味深い研究課題であるが、紙幅の都合上、本稿では簡単に触れる程度にとどめる。

注11 小数点については、第2位を四捨五入し、第1位まで示した。但し、 χ^2 二乗値とp値については、小数第4位を四捨五入し、第3位まで示した。表3も同様である。なお、クロス集計表の作成、 χ^2 二乗検定、残差分析はIBM SPSS Statistics Ver.20を用いて行った。ソフトウェアの使用法、分析の方法については、広島大学大学院国際協力研究科の木村光宏氏に教示を受けた。

注12 正の値の場合は多い、負の場合は少ないというように言及する。

注13 神道における死後の世界を表す語として「黄泉の国」「常世の国」「高天原」などはあるが、これらの語を回答した話者はいなかった。

注14 この(1)「かつてはカクレキリシタン信徒だったが、現在は仏教徒となっている人」は、(2)「調査時点においても信徒組織を維持したままカクレキリシタン信仰を続けている人」とも、(3)「ずっと仏教徒であった人」とも信仰の意識や態度が異なるので、表2において、「その他」に分類した。

注15 調査では、話者の帰依する宗教・宗派が何であるかについては調べたが、各話者の宗教に対する関与の度合いや、信仰の強さについては調べていない。このため、「宮崎・鹿児島の話者は長崎・福岡・大分・佐賀の話者に比べ、帰依する宗教に対する信仰心が薄いために「天国」を受け入れている」という可能性を完全には否定することができない。しかし、調査の現場では、そのような「信仰心の強弱にかんする地域差」を感じることはなかった。たとえば、教会／寺院に通う頻度、喜捨／お布施の程度、読経／祈りの頻度などを調べ、それを指標として「各話者における宗教に対する関与の度合いや信仰の強さ」を数値化し、「天国」の受容との関係を確認すれば、より正確に事実を捉えられるだろうと考えている。

また、長崎において「天国」が受容されない傾向をみせていることについては、「「天国」はキリスト教の言葉」という意識が影響を与えている可能性がある。

⑨「天国」はキリシタンの人の言い方で仏教徒は使わない(仏教, 長崎県南松浦郡新上五島町榊ノ浦郷, 2004.3.8) ⑩仏教では、「極楽浄土」「極楽」。南無阿弥陀仏を唱えれば、間違いなく、「極楽浄土」に導かれる。「天国」はキリスト教の言葉だろう(浄土宗, 長崎県北松浦郡小値賀町笛吹郷, 2004.3.26) ⑪「天国」はキリスト教の言い方で、仏教では言わない。この土地では言わない。洋風の言い方(曹洞宗, 長崎県松浦市御厨町前田免, 2004.6.20) ⑫テレビでは「天国」を耳にする。キリスト教の言葉だろう。この土地では使わない(日蓮宗, 長崎県西海市西彼町大串郷, 2004.6.28) ⑬「天国」はキリスト教の響きがある(浄土真宗, 熊本県菊池市赤星, 2005.9.4) ⑭「天国」はキリスト教の言葉だろう。あまり言わない。但し、若い人は使うかもしれない(浄土真宗, 熊本県荒尾市日の出町, 2005.10.1)

このような説明は九州全域において全262人の話者のうち53人からなされた。長崎県で

は3分の1以上の仏教徒が「天国」はキリスト教用語である」という内省を報告しており、長崎で「天国」の受容が進まない一因となっているのではないかとも思われる。しかし、この内省は話者の自発的な発言を記録したものであり、全話者に確かめたものではないために統計的検討を行うことができない。今後、補充調査を行うなどして、確かめたいと考えている。

引用文献

- 小川俊輔 (2006) 「九州西北部地域における中世キリシタン語彙項目「死後の世界」についての地理言語学的研究」 Guido OEBEL, ed. *Japanische Beiträge zu Kultur und Sprache Studia Iaponica Wolfgang Viereck emerito oblata*, pp.152-168, Lincom Europa
- (2007a) 『九州地方域方言におけるキリシタン語彙の受容史についての地理言語学的研究』 学位論文, 広島大学大学院教育学研究科
- (2007b) 「九州地方域方言におけるキリシタン語彙 Christão の受容史についての地理言語学的研究」 『広島大学大学院教育学研究科紀要』 55-2, pp.173-182.
- (2011) 「日本社会の変容とキリスト教用語」 『社会言語科学』 13-2, pp.4-19.
- 加藤早苗 (2006) 「現代日本語「天国(てんごく)」の出自から定着まで」 『岐阜聖徳学園大学国語国文学』 25, pp.101-116.
- 鈴木範久 (2006) 『聖書の日本語』 岩波書店
- James Curtis HEPBURN 訳 (1873) 『新約聖書 馬太伝』 (『近代邦訳聖書集成⑭』 ゆまに書房復刻所収)
- Shunsuke OGAWA (2006) A Geolinguistic Study on the History of Acceptance of the Christian Vocabulary in the Northwestern Area of the Kyushu District of Japan. *Dialectologia et Geolinguistica*, 13, pp.108-123.
- (2010) A Geolinguistic Study on the History of Reception of 'Contas' and 'Rosario' in the Kyushu District of Japan after the 16th Century, *Dialectologia*, 4, pp.83-106. (<http://www.publicacions.ub.es/revistes/dialectologia4/>)

付記 本稿は2007(平成19)年1月に広島大学へ提出した学位論文を基にしている。学位論文の執筆にあたり、主任指導教員の江端義夫先生をはじめ、指導グループの先生方には懇ろなご指導を賜った。また、広島・方言研究会、広島経済大学経済学会研究集会、九州方言研究会でそれぞれ本稿に関わる趣旨の異なる発表を行い、多くの先生方から有益なご意見、ご助言を賜った。また、査読を担当された先生方には、改訂のための具体的なお提案を頂いた。記して御礼申し上げる。なお、本稿は平成20・21年度科学研究費補助金若手研究(スタートアップ)(課題番号20820061)「九州地方域方言における渡来語の受容史についての地理言語学的研究」(研究代表者:小川俊輔)による成果の一部である。

———広島経済大学准教授———

(2011年4月21日 第1稿受理)

(2012年2月3日 最終稿受理)

The Influence of Religion, Region and Situation on the Acceptance of the Term *Tengoku* (Paradise or Heaven) in the Kyushu Region of Japan

OGAWA Shunsuke

Keywords: language contact, language change, acceptance, Christian term, geolinguistics

A geolinguistic survey was conducted at 300 locations in the Kyushu region of Japan to measure acceptance of the term *tengoku*. From the survey results a linguistic map of the usage of *tengoku* was constructed and used to analyze the influence of differences in religion, region, interlocutors and situation. The following things were revealed.

1. Catholics and adherents of *Shinto* tend to accept *tengoku* more than the believers of other religions.

2. Adherents of the Jōdo-shin-shū sects of Buddhism tend to accept *tengoku* less than the believers of other religions. The reason for this is that they have original Buddhist terms, such as Jōdo, with meanings equivalent to ‘paradise’ or ‘heaven’.

3. *Tengoku* is more accepted in Miyazaki and Kagoshima prefectures, on the other hand, less accepted in Nagasaki prefecture.

4. *Tengoku* tends to be used when people speak to children, but not when speaking in a Buddhist temple.